

西鄉隆盛佩刀傳授記

西郷隆盛佩刀傳授由来記

枕崎港の西側を自然の堆積の松の圍む山がある。此處を小湊岬と云ふ。

其の山の突端は海に突出して波の洗ふ處を松崎ヶ鼻と云ふ。呼ぶ名も相應

しく夏も冬も緑みず松葉繁り蔽ふ。松崎ヶ鼻より枕崎港の東方へ

向つて海中の立つ一つの岩がある。此の岩は何時の毒ありぬ。何百年の昔

からの此處にお坐れおたのめ。這ひ出たりの。頭角は天にお向つ

て立つ。根はトマシリと海中深く坐り込んでゐる。此の岩の後面はサモ

従者の松の大岩小岩が續つて松崎ヶ鼻にお接してゐる。暴風雨に大

波吹玉付のくとも怒る甚き。又天氣清明に女波が腰に三つハリ

唯々とも喜ぶ柁も見せず、唯だ黙として海風に晒らす。此の岩を  
枕崎の人は立神と名付けたる。凡てを葬る時の流が逆しまた戻つ  
て、古代の一片が現代の流にまたとも見ある柁も奇岩だ。

大佛も小佛馬を持つ枕崎の漁夫達は必り立神の圍りふ冬も

夏も夜毎の漁をする。まして冬は名賊漁の灯が要ふ実在す。

今宵は冬とも言ひたむらり波の風だ物静のたる夜である。空

を光銀梨地を撒く星座船迫の閃めく黄色色の魚鱗

海も映して神々しき光を放つて、細く小さく小波の中へ溶け

消えてゆく。大傳馬一棹、遠近の瞬く、渾天の申出、立神の沿ふて  
松崎ヶ鼻と程遠のらぬ、角野の止る。一人の仕年船頭が、臙小  
立つて、臙を漕ぐ、行くと見せて、勅めず、止るめと思へ、暖やめ小  
漕ぐ。モウ一人は老船頭、垂れた釣糸を繰り上げ、又暖やめ小糸を  
おろす。繰返す事二、三、五、諦めたの、静めに糸を繰り上げ、  
臙を持つ仕年船頭小、

「良者、何の位釣水たろ、あ」

「ハイ、まだ七八匹位でせう、仁次郎小、あ」

「ソノカ、あの位でも仕方がな、モウ鳥賊は食は、ン、モウ惣めやう。時も大分更けたろ、あ」

少し寒むくたつた。若い頃は折々でもなつたが、年の務の骨送で泌みる探だ。愛ふ火を焚つて、大きいのを焼つて食ふよ。な良志。

ハイ。そいですが、大ききそいなのを食ひながら、又何時もの話を聞きます。

云々、云々して呉れ。何時もの話、あの西御先生を俺達が大仏小迎ひ小行つた時の話をな。

老船頭の老顔のは五十有年前小感激と老悦並浸つた華やかな当時の過

去の歴史が、萎水ゆく面上に精をたる色彩を描き出して来た。

良多、お前は妻をりもせん同じ話を聞くのがおんたに楽しつめ。語る俺としても七

十になつた今日迄、後にも前にも一滴切りだつたから、非常に楽しみふして居る。

老船頭の語る細々たる聲音に相應はしく、船辺に打つ波の響も物靜  
かにヒタヒと暖やかに言回ふは年船頭も、冥哲の聲息を真接に夕つた

老船頭より當時の事を夕くは一種の榮華盛に打たれる心あらの余しみ  
として夕つた。老船頭中全仁次郎とは年船頭竹下良吉が

昔不被母の多賊漢りに連立てしは幾年の。二十幾年よ。老と若

と新するも書きし濁ぬ因縁跡はれて居た事である。此の語  
は幾人の幾十人の厭きおせず返つて良吉より望んで夕き入る。

夕く時將又當時の標を幻に畫く時良吉は吾は今人の將た昔  
の人のと思ふ迄で吾を忘れて、余念もなく夕入つた。

なア。良吉りやきち私は天保十年てんぽうじゅうねん生水しみづだ時は日本にほんあ千余ちよかは尊皇そんのたうの佐幕さばくかと我わが

家けも町人ちよじんも天下てんかを拳ありて殺伐さつぱつの毒どくの申まを小育こぞだつた。毒どくが毒どくたのり、漢師りやうしだとして

争角くまごころ力の一番位いちばんぐらゐは橋けいこ古こして置おころと思おもつて大だいか取とつて歩あるつたものよ。良吉りやきち

お前まへも柔術やわらうをやると言いふではふいぬ。何たも漢師りやうしでも、柔術やわらうも習なりやうても

良りやのよ。ゴックごうくと噫いを吞のんで、身み後ごで、そりた目め二十にじゅう方頃ほうごうは比ひの枕崎まくらさきではア

横間株よこまぐらだつた目め。微笑ごうごうの申まを小僧こぞう誠意まこといの色いろを仄ほのめかした。微笑ごうごうは消きえ

て瞳ひとみは遠とほき影かげふ引ひきずりぬゆく標めふ空そらと酒さけとを坊むすぶひ平へい路せん

上じやう小せう西せい上じやう小せうは異い調てうの色いろ遣ただよ。一いつ下げ字じに結むすば水みづた唇くちびるは除おとりに綻ほころぶ。

俺が二十三才の暮の十一月も押迫つた時だつた。鹿角島の母の枕崎へ、早馬が  
下つて来て、尚早小屈張の船人十四五人を募つて、大岳龍湫へ西御先生  
を以て伊比の事な、船番取あり呼び出してあつた。私道十三三人だつたと思ふ。  
お役人も私事の和船に同乗し龍湫に向つた。

唯時文元年十一月 西御亭例年 三十五才 中釜仁次郎 年七三才  
此迎の船龍湫逗留する事四五日 海は風風は追風 出航の好日和  
進む事五つ時 寶岳 西方に船足の掛つた際一浪の颯風黒  
い雲大い波のくわりだ。満身の筋肉を骨格の上までたき付  
けて出来上がった物な若者の腕でも浪風に乱れて来た。ヨシ！！

返せと言つて、引返へしたのが、元来た浦の龍湫よ。

「良吉、夜の時よ。今思ひ出しても肌寒切を感ずるよ。恐ろしくつた。ぐーて焼し  
かつた。嗚呼！！西御先生は偉人だと思つたねし。」

と夜の時影を千里の遠きを見詰める探小池と追ひ求めるかの探だ。  
その人の懐を情とに吾の心を飽和させて只一真の感激である。

良者。舟水は斬りて船が龍形に這入る者あり、先生が非常にも立腹なすつて、因り船は如何致させし事か。川い。海が荒れました故、戻しまして座つます。

何に狂浪風が荒れ船が進まざるに致しても、何故一應私にその事理を侍らん。今、事天下の大事に属する事、此は一日早く帰席致したいのだ。舟水に一應

の挨拶も早く、身勝手小振舞とし事不届致のせりおや、此用捨おく切つて捨てられし。何事おも怒りの色を見せよ。而して先生も、此の時はおりは強いの立腹であつた。サア。此切られるものだ。顔も色も無く振出す者もあると云ふ

不騒ぎ。向ふは而して先生此方は高き船人。免に角く誰の以訖のゆけ。志一踏にゆこう。舟水あり、仁次郎お奇一番若くて交胸あり、此詭計に行つて

こいと俺も先生の言へ出る以上、命はあつたと思つて、此の時はおりは、何れ程の俺も、實際、先生の室へ中より、口で黙つて置へ顔、播りつけをたけたつた。

先生はふんと仰せられをあらう。何時白刀が頸に刺れ、未だあつた。腹は脊にヒツシヨリ。瀕して災をきたる先生の眼射し、此分也相手、微笑さるる。湛はせ。

招きは誰か、い、枕崎浦の船人中、金村の紅粉、此小舟をいす。英傑と船人、一國の爲めに身を献げ、他は同志の爲めに、向刀の下に

身を晒さんとする。心と心との隔りは、大小舟とも一氣と燃ゆるは、只一

犠牲の心根は安に相互の心と心は相反映し今ふ。

何れに未だ普通の聲音で述べた先づの言葉も、私も幾分かそのゆとりが

出て、「ハイ。旦那様は友は誰に申訳には在りませんヤウ〜。それだけ言つたよ。

浪風が強ければ致仕方があつた。又天氣の快い折りに出航致さう。後々休むせよ。

皆と言ふて、酒造で賜はつた。今迄での恐怖心は消え、吾が身は是れかと計り

嫉妬あつた。皆の老むは他人が見れば笑止の沙汰だらう。位は老むは嫌だつた。

この事があつてから、先生はに波、江原と云つて可着つが、吳水た。その水あらは、

余に思ふて、天氣もよく、遂に龍嶽で年を取つた。四月十日、西の先生が龍嶽に着

つた。記念日として、勇力の備しのある懐である。此の勇力が變つてゐる。勝つた者は嫉

しいから、夜美はやらん。負けた者は口惜しからず、予つて振置である。鏡を抜いた。

酒樽のり、お子まゝ呑ませる。懐はしよ。今時俺の勇力上手と見て、先生は是れ江戸

夫〜りんめと、吳をも迎へて、中風あり一と七日。旦那様上は、良、浪風では六、

人影遠く、高れし、亭海の孤島、夫の龍嶽の仲者として、教に繋る

後の山、深くして、静かに、甜瓜を、甚はす、可、西の港、盡きぬ、別島を龍

伊氏に告げて、浪風帆に、尚ち、玲瓏たる、冬、の海、暗を、蹴つて、疾走す

事矢の如し。只寒風寂として耳を拂ふのみ。睡む事三時の五  
つ時口を良船の口の近く、颯つと寒き下る旋風憂とある板の響音。

キリくサツと帆は甲板に降ろされた。に次は是れを旦那控に申上げいし。  
「オしと云ちあつて先生の家の前へ行つた途端、前へは内わらうの水

「オし。は波の風化の帆も降りして船も止めた物だか。ハイ。急に風が西に変はり、  
船が傾つた。於荒浪に矢午が波に洗ひ流さるゝ故、船を止めず、水を捨はあけれな  
ありません。刺さるゝ矢午と言ふものは是れをうへは相海をぬぬのめし。

「ハイ。その矢午でございませんと船を道ませる事が出来ませんし。  
「お。今彼の船人が、海をり物へ上げて来た彼の名の重要なるものとは言ひ侍此  
の寒中に大儀である。此の忌を取らせよ。先生は矢づりう、着せ居しし夜装を彼の

「旦那控此の風化でございませぬ故、一時此の口を良船へ避けて標と思ひませし

船は只の良船の津へぞりくに錨を投じた。風強き海浪高し、

一夜を船にぬのした。雨は憶んだが、昨日に妻はらぬ風浪高し。

「に次、犬を降ろして今日には夜の小を探るる。供致せん。

坊ッ坂道 若繁の野路、木の岡、隠水の畔道を登り行く事幾町か。



且那探出未上りました。有難。是で気分も精を致した。愈本國へ上陸致すも目近か  
前語は人に後句は私語する探に本國の風雲を他に寄す海  
孤島に清居する事。三有年。秋。切迫りて吾が歸國す。  
過去を巡らし、行先を思ふ時、先生の心事、一種慙愧に打  
ち。静ああんど、力強く。仁徳と呼ぶ者にも心情の静あ。

仁次郎も先生の更まつた聲息に自づと襟を正して、端坐する。

仁次郎 去年龍淵を出航して嵐の舟が龍淵へ戻つた際、此の身供の一言の事も  
よく、勝手に振舞ひし事言語同断の至り致し切つて捨てる心算ぢやつたが、年若き  
お前が密に換つて、怒り松の前に来た夜、主にも分らぬ心根は身供に何物を教える  
て呉れた。立腹の上とは言條、余りにも凄果可であつた。身は船人でも心の清玲さに  
引き入れられた。是よりもあること必ず貴時の心慮を捨てるあ。あつた日より今日迄下河の例へ  
日は浅さうとせ、お前の気情に身供は心悦を發あつた。於夕身供の身廻り用を達  
させ、お前が愈々此の身もお前と別れる日が近づいた。陸へ上つたあ、身供もた放せめ  
記念として、此の志をお前に與ふる故、大事に致して置いて呉れ。此の刀は何時身供が山狩に  
滞してゆくもの、此は身供の魂が籠つてゐる。お前も今の心を捨て、また船人でも身供のたしあ

みは肝要ぢや、その一刀もお前が衣に以てらあい魂ある故、  
船人仁次郎は余りの以外、端をりものに、余り英聖の情魂の深きに  
只々偉歴せられ、身は船板に釘付けせられ、水た標に平伏して、  
無音の上に、感激の情を湧かす。

仁次郎、他に望むものがあれば、夕き三田ヶ道はずが如何ぢやあ。その滞刀に書きたまのでもと思へば書  
つてとりすがし。言と一句、徳情の通りである。

語る人は一身以て、日在六十余洲の浮沈を、一身に受けりとする  
偉傑、一夕は一江村の船人余りの間隙である。

取るにも足らぬ船人達の秘に、大切なる物品迄でも賜をりし上、舟難き、一言業も丁真化  
り、実以て、有難き、仕合せに、所産ります。是の上、何を望みませう。必ず、刀は家宝として、保つて置  
身供、一夜江戸入り、折、必ず相模の方、心してゐる故、夜半、節は教せる故、是、此身供を頼  
つて、参り来よ。その水では、未共、身に大事に致し、業を勤めよ。何から、何迄、有難き、仕合せを  
家を出でゆく、若人の面には、上氣して、紅を射し、双瞳には、一滴の、白玉を  
宿す。是れ、悲激の涙か。

船は出てゆく、口が波の傳を、ハ反帆は柱に墮風受けて波を引く。  
又雲変りだ、仁次郎且那探に申上げ、オーしと答ふた、仁次郎且那探風変りてあはす  
云う。船を入るは何夜が近き少とを理でも鹿見島へは進まんか  
ハイ、此の風では鹿見島へは六を敷し、四夜にいます。麓枕崎へは向けられますか  
云う。麓枕崎へ船は入れ、ハイしと言ふ事、枕崎港へ着つた。

文久二年二月十一日の深更。

且那探船巡視でやないます。云う。黙まるとつれ。ハイし。  
船番平の武士横柄にして船板に一步足を踏み入れし瞬間、窓に  
人あれと言葉を多く。戸は肉よりサツと開かる。一ト目見た彼の武士聲  
出し、湯舟の場にあ伏して倉卒として引き返し、更めて先生を  
迎ふの使者来る。先生休憩の時間も惜まれる程にして、鹿見島へ奔走す。

遊ける日は、追へども帰らざるに、お中事、長し名に暗きに葬むる能  
はず。語るを、おしみに思ふ心に、露矢と中るは、才も、才も、志深の火祀  
である。娑婆と速府との界を、速ある、向髪、今の者、身を思ふ不時、



を此の毒と人にと別れの言葉として、後継者林下良吉に見守  
らぬつゝも眠す。

大正四年十月十三日中金仁次郎享年七十七才死す。

註 後日譚

後継者林下良吉出澳中颶風に合し船顛覆せし  
時おろすし船自体より幕に起き上る是れ刀の  
灼たる力の顯あらんと。

昭和七年八月十五日稿ス

林下良吉口述  
境山工文責